



## 精神科症例報告の上手な書きかた 第2版

仙波 純一 著  
星和書店  
2019年4月 144頁  
本体価格 1,800円+税

表題のとおり、本書は症例報告を控えた精神科の専攻医、若手医療者のための指南書であるが、単なるマニュアル本に止まらない。精神科医にとって必須技能である「書く」作業についての多くの示唆を富む教書であるため、症例報告などの予定はなくても、すべての専攻医やその指導医の方々、記述力を高めたい精神医療者に勧められる。また、良い症例報告は、筆致が優れているだけではなく、精神科医としての観察眼が反映されているが、主題である症例報告の基本的な手順の説明とともに、精神疾患の「診かた」全般についての要点を押さえた解説が、本書の価値を高めている。

書評子にとっては、自分が学会発表をする前に読んでおけばよかったと、心から後悔した書籍のなかの1冊で、10数年前、先輩からの口伝のやり方で、右往左往しながら発表の準備をした経過は貴重な経験ではあるが、後輩に指導らしいことをする立場になった今、彼らに同じ轍を踏まさせず、症例報告が貴重な学びの場となるように願いを込めて、本書を薦めている。本書は序文から最終行まで、全部で130頁ほどで、語り口調のような平易な文章でまとめられており、発表準備の土壇場になって手にとっても読み切ることが可能で、学会発表に不安を感じている精神科専攻医・若手医療者にとっても良き味方となるはずである。

内容について、少し紹介すると、第1章と第2章で、症例報告をはじめとする精神科領域の執筆についての総論、

第3章～第6章では症例報告の具体的な記載法と雑誌掲載までの流れが記載され、第7章は専攻医、指導医にとって重要であるが論じられることが少ない精神科専門医、精神保健指定医などのケースレポート作成の助言、という構成である。第2章および文献検索の方法では、インターネットの進歩に対応し2007年発行の第一版から大幅に追記されている。PubMedや医学中央雑誌などのデータベースや、日本と海外における症例報告など、比較を交えて説明されており、さらに詳しく知りたい人への多めの参考文献についても記載されている。

第4章「わかりやすい文章を書こう」と、第7章の「専門医・認定医申請のための症例報告の書き方」の解説は本書ならではの箇所と思われる。精神医学に限らず専門家としての品格を求められる文章の書き方について、例えば英字アルファベットは半角で書くべき、誤字脱字は心証が悪いなどの文章の書き方の基本について、当然できていると思っていながらじつは知らない文法上の決まりごともあるのほかに多くあり、学び直す機会になる。また、第5章の論文投稿では、経験豊富な査読者としての著者の視点が惜しみなく盛り込まれており、論文作成をする方には必読の箇所と思われる。

最も印象深いのは、「強迫症状を前駆した統合失調症の1例（仮題）」という架空の症例を元にした、症例報告作成のシミュレーションである。ここでは「症例報告向き」な稀有な症例ではなく、どちらかという平凡で見逃されがちな診療のなかの気づきについて、ある若手医師が、先輩医師に相談しながら、ある人について丁寧にふりかえり、学会報告のための症例報告を作成する思考の流れと、報告する意義を考える試行錯誤の過程には、精神科医の患者に対する診療の真摯さも描写されているようにも感じられた。

症例報告や日々の診療録において記載する「言葉」を大切にしている医療者でありたいと、本書を読了し、そう再認識をした。

(今村弥生)